中村俊定文庫
文庫 18
445

早稲田大学図書

杉阿蘭統

桃三代序

其業や天に基き葉や葉に生り實や
三〻〻し偏々に得仙といへる滑稽より
奇種偶之〻〻今爰に生れ出るも
我祖翁八生先桃地の蕚ふりとて
桃青の二字称きい桃子不熟の

中村俊定文庫

心ふるむと寛文とをたゝ物ゝ比る則清
兼好の賢の〳〵ゝ成たゝひ寺矢で葉て
八海道初旅こ孫も浦を浦ひ初ゝ
西ハ知ぬいのゝ山ちゝ山ゝ岩ゝ崎の
隈〳〵を漕蹴蹄擔簦て此廿九十七日
跡ゝ武蔵野ゝを深川ゝる芭蕉庵
ゝ俤らきしゝ時ニ三十六歳 或日盟ゝ雨の音

なゝて扨扨戸をおとのふと訪るむのえ
見ゝ人ゝ回郷の士ゝ理氏ゝ此新見も
同ゝ古ゝ跡ゝ風蕉を出ゝて浮ゝ流ゝ
のゝおゝひ意家悽慨の心を詠詩の粗々
述んゝ志ゝ有ゝ翁ゝ去ゝる八回一
素氏ゝ云同家の孫をはみゝて今ゝ
お形ゝ道ゝ遊ゝんゝ者旦ハ嫌ハ嫌ハり

とゝ則桃陽と名付のつゝかゝて蕉門の
向上向下を通暁せり三子ゝ
稽て翁の知識浴ゝ出きて京師の侯
も恩の深き事を思へと涙をゝ
浪花の逝去も此先生のおとゝ
出給しもゝ知しきよ江都蕉門
建立の地ゝて名ゝ翁伯を称ゝ者

多しゝ共ゝ嘉屋桃隣の四哲八世ゝ
江戸の四大家とゝ云ゝ農法ゝ主も
東武の古老ゝ種ゝ聞ゝ如ゝ
ゝ
ゝて九ゝの歌ゝ
俳諧ゝ多数篇ゝ著ゝ筆ゝ執
江都の俳士ゝ師ゝ者ゝ翁

浪花の変化流行に長く此老の標準と
出られたる又宮詩の国主人宝暦年
壮年にして書を以て光徳に（干時正徳二）出れ
藝林を携へ入て蹤跡を共にして相つ
奇秀一一微笑の奥旨を得ると
いとんかくて俳諧前吟世の移り四十餘年
俳諧力の至る所風雅の眼まる落ん

宝永年中七を初め　堺西の岳人
河りといとさんやすさハ祖翁より三代
於豊脇と同じく天下指を屈する
最第一の人なる俳諧最一世角
嵐雪杉風を以十大才なる面々
接し言水不角百里秋色雄花引
匂ひ文人庵を開き卒哉こよと世

あるとき桃のもとより大白き人の
古屋を踏み来り咲くの森陳に改め
が一ツハ道の興廢をとりに先師へ
報徳ゆゑ免と其門弟ハ習ふおもな
四才の頃友蓑太素丸我が家を回る
是を勸る事ハ為て時を待と
いふ俗記るゆゑ代に桃花と

字之一無同つの古巷ゆゑ桃園の
黙印我消滅せ高ゆゑ記
巷子五歳的と其毛孔仙十五
塩もうえ能ゆゑ春ひ桃門の
起るを後一孤千桃園自家的
一篇とともに桃陰へ懸るかく
音のゆゑ重なれる事も之ゆゑ来蓑

門無茶の花瑞雲やハ子まき
隠るゝ身なれ〳〵ゝ世界を遍く
その頃を詳ゝ世へ編せしの色
衣更ふ月影の高ゝ香
神代乗物ゝ毫に採るゝ
ゝ世界ゝ其のあゝ南ゝ
法ゝゝ桃三代と名付のいん年

脚ゝゝ身ゝ高ゝ岳ゝ と申賜る
事ゝゝ

明和三年ゝ 公竟山人宗瑞述

桃三代後叙

文亟の羅漢三千乃至五百さらに立て
あり孫さ日のむ法教所を者仏さ伝
てめ十能十藝みいさくの道若者
有さ生つ業さ加山さも志けく
業之廣さりて仏のもさ師の法伝
生涯の能とみ所を業人所し技や生

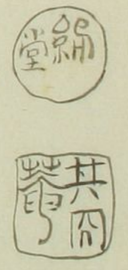
世ゆさの人能徳さ及さ伝且師法を
屋〜道伝さもの情の業今やいの教
八俗僧の業の師乃名伝自ら多弱う盗也
う伝師由を城さ伝てめ一て法の
ゆ法之欲〜き伝其角風さも生世み
一人みて業んて伝東を所免技の藝ユ
その家を三人兵鳴る屋情屋伝や業

[illegible]
拾ひ得て讀り此一章の中に兎園
乃古人を馬史等師[illegible]流の作[illegible]事なるか
きて竹藪を掘て[illegible]とせふるの作きてのち
なれて[illegible]人[illegible]藝の樂みして
道[illegible]修せ[illegible]ハ智[illegible]すとも世ふ業[illegible]
の清ふる人と[illegible]ある[illegible]

桃蹊 事ハ初の序に讀て略[illegible]を為て二三子合心して
彼の続を記さん事[illegible]ある今時[illegible]
[illegible]人なり[illegible]氏の樹[illegible]
桃を花[illegible]実[illegible]ハ溪ハ[illegible]
[illegible]ハ又[illegible]
[illegible]廣こうて京都[illegible]
裏中桃[illegible]

かくれ弱堂主人書

明和丙戌十月十二日



太白堂桃翁之肖像

參陰軒摸書

太白堂附屬点仰譜

一種風流推國色　十二点

色與香無價　十、

有玉聲　七、

朱　五、

長　三、

衛　一点倍

後　桃隣

歌仙

引尽す菖蒲の跡や田のつもり　太白堂　桃隣

其五月雨の末の枝川　有圖改　桃隣

國〳〵の杣から仰ぐ河屋まて　素丸

さあと折手の鞍ゐと鳴ん　謙堂

立あかる爲の行末に三日の影　宇端

帆よ珍しき秋の初風　畔荒

袷ひとつ包ミ添たる旅さろも　東川

秋雪すやつたる子は遣ハるゝ　陶稚

恵病と知らで氏条ゆのくすり　嵐亭

人目も忍も祇地の枯〳〵　阿青

堀蕨る鎌倉山の星かふと　白牛

立て酒のむ先の逸　微雷

よゝ癖も三十姉の月の客　六窓

時計はつせと鵯の鳴ゝ　夢右

霧雨に見る月の関のあり甲斐も　人左

五会授けて駕ハはる〳〵　吐月

元のいけぬ風も花のこほれもの　周竹

春くれ竹の様の日蔭り　乙児

初立る糸女か足の雪とけて　盤古

六十一の冴帰る　宗端

湯泉山の義理に有も古めか　桃陳

鶴さへ足せると讃をしたかる　嵐亭

夜冬を兼て居士衣も暮嵐　畔嵐

光れてもなし　青葉の瓦根　東川

何ものぞ西主の庭の却も永き　謙雀

大盗人の覚ぬ咲ひ　素丸

東雲を告る卯刻の鐘の聲　陶雅

燈籠にも合ふ水のしょろ〳〵　桃隣

氏貧を月ハへたる窓の内　斑象

熟柿なくてハ君も不侍も　宗瑞

矢橋ゥ望めハ膳所も妖艶の秋　雪雀

皆鴉色　夕鷺の夕照　白牛

藺撫桶　あふ畔を譲りあい　吐月

日頃の愛詩　ものかくる　陸　六窓

古き名を　ふたゝひ花の接穂葉　夢太

極楽千歳の不易流行　盤古

大古句

桃翁一句　桃隣三、　素丸二、
謙重二句　宋瑞三、　畔蒐二、
東川二句　陶雅二、　嵐亭二、
阿音一句　白牛二、　雷重二、
六嶽二句　夢太二、　人左一、
吐月二句　周竹一、　乙児一、
盤古二句　政象一、

継絶興廢たいとを賀して

うけつきし枝の栄えや桃の花　祇菜
蛙の跡の墓も　溝川　桃隣
油煙斎しきりに口も冴ゑて　宋瑞
餅ゝ里酒の方よりたそふ　祇葉
結足の月も振向仕手はしら　嵐亭
亜るとく色かえぬ秋　宋瑞
初汐の退るも飽る九十九里　素隣

登てさませと岩圃する食　嵐雪
つき合も木で鼻こくる江湖寮　祇素
けふは〳〵と延る綻　桃隣
跡かゝも塒の鴉とすり躇　宋瑞
あきあけ堀も今ハ松風　祇葉
鎗突た人しや〳〵と指をさし　嵐雪
懸り娘の目もと口もと　桃隣
初瀧寺悪の敷もこもりけん　祇素

鳩の羽風ふ一ト炷　嵐雪
己の刻ふ咲立ツ華もひの恵　宋瑞
いまた盛りふ足ら厳ぬ蕚　桃隣

表八章

みのるへき花の手柄や乗の門　春蛾
篤籠の跡へ雀子　桃隣
五郎吉と拝ひ小春の日も暮て（にか）　畔嵐

隠居田地の月貫ヶ百石　宗瑞
強過て飽るに早き蔦しかけ　桃隣
鯛は潮へもとる　二ノ膳　春蟻
八乙女も裳束とれは夕月夜　宗瑞
暑さと秋の入替る　乙　畔鳥

仝

浪よ幾秋さらし揚てやけふの月　吳造

初子(ミ)の新酒でまハす盃　桃隣
秋暮る市のなくれのせわしきに　文尺
餘所の待つと遠ふ福嶋　宗瑞
物いふに形氣も揃ふ一家中　桃隣
乾くの眼をこやす錦桂　吳造
仲撰は金の入ったる住居乙　宗瑞
豆腐買ふたりや河豚に呼るい　文尺

半奇仙

雁ト共ニ船 霞ヲ 返ル

山のわらひも 専を 時

動クニ 東風ニ 笠ヲ 楠ヲ

肥ニ北ノ露ニ 扇ノ芝

研立し鎌や 脇先るらん

あせさの 殿ヲ

姥ノ見ヲレ 夢カヨミヲ にまくら 敵ヲ

刈ツレ 膳ヲ

象耕田

舜民

釜ノ間ヲ桐ヲ 流スレ 祭ヲ

神代より瓦の紋は巴なり

春を隣る福寿草

亭ノ炷ニ防クし寒ヲ 蜻蛉

玉ノ竜ノ宮ノ 完ム

庭ノ淦ニ 凌クレ 暑ヲ

枕ノ蜘 蜻蛉 月

恩愛へ 哺ニ 度に 口明きて

蟻 蟬

雪道のさびしきの里を悲滝
湯一岩
苔ヲ詠レタル哀ニ
結ぶ手綱の餘り哀かな枝

白桃之引

爰ハ親仁あり我月華の旧友ハして
作軒中ハ七友の一人ちうされハ師が
名号を継て其一流をも建立せよと爰

かしこの進メも数々少之たりしかこふ
たハ例の言ミをいとひ文ハ習官盤子が妙を
得されハ句ハ祖翁芝師の風骨を傳立す
いかなれは役仕ハあたらしとなりされを既ハ
雪ハつもりのきなり翁ハは敏のうを使も
よるなれはやさは三千年ハなるてふ恩も
送らすなりなんハ中意なのうんいき花咲
まちの名を継はやと諸君子の進めもたし

かたくて我と今年大白書の後主となれり

多き桃多かめ作有

白桃や雲も落す水の色

こハ何と左くも吟もおもひもたれはいさと

古墨か白桃を記にが百歳の風雅をこと

ふく事なはなり侍りけり

其水の色も絶穂や桃の花　柳門

蘭の若葉の中の蘇艸　桃隣

演色しき霞を簾巻上りて　嵐亭

古鴫キ詩をあもひ出したり　文尺

名月にから尻馬の目を見し　陳門

鎌研音に小田の良寒　尺亭

麦の白米紙くの花の散にけり　門尺

扨テ象戯ハ弱い山伏

居眠りも代りく の倶ふたり

蚊にまよふなり廣間なからも

なよ竹の篠突く雨をはね返し　亭
氏宮鑑ハリつ戻るやら　川
吸筒の明たて腰のふつり合　陳
薪を杖に山の入口　尺
仙術の師匠の袖ふるい嘘をうふ　宇瑞
茅じやとても日かな一日　川
月花ゑ二十五弦の最早か瀧の糸　亭
こちの三もめも家ゑうかれる　陳

洗濯に出代る神や禊すらん　尺
髭題目の風ゑ吹らら　亭
条礼といへば美尽し善つくし　川
名の茗荷ゑ前後覚えす　尺
着船ゑ丸風くと聲をかけ　亭
清次郎なる朝の燈明　陳
雨たれの土へ届かぬ初瀬山　尺
たのまれ文の安大事ゑ　川

化物も人鬼もなき長廊　隣

又来おつたと吹て遣ル蜘蛛　京

鍋の茶の黒さい月の移つても　尺

侍普請小屋はたゝぬ秋の月　川

毬栗の尾原あれは秩父との　仝

羽織袴て甚実の使者　隣

戀病のしれぬ所を問ひくすり　京

かりの枕に京か一冊　尺

華の日をまねき過して猫恋し　隣

なかし〳〵と拾ふ青柳　隣

名改のるを告るとて

華の咲撞つたへたり桃太郎　桃隣

うもれ一庵も人の訪ふ春　五庵

蚓あ一都の鼻をこそくりて　宇隣

表八章

仇し名は雲よりて星ヶ山桜　懐石

散り心も若世の上　枕陣

凡夫る紙子の近習取巻て　宗踊

出来た内すも墨絵成へし　東川

土地ありて作らぬ枯も葉かしまり　桃陣

男ならの未の届く磯の家　懐石

食喰ふ子ども戻る暮の月　東川

節の木綿ふ智恵の勝劣　宗踊

東踊

綿貫りて夢望思ん出るもかえ

浮世を旅ゴ山ゆきまれ　新々

第桜ゴ概の桑ゴもよあわ紙て　呈踊

伽羅の油の頂ぎしく　李門

草柿も月の文ふの夕ふ紙　宗子

八重咲ふ菊の上凡　宗巴

跡床の自由ふ秋をふり向て　茂樵

老ひ弱てを唖も　調法
捨ものする書もしも　俳句哉　梅年
聖人の屁は　拾子　皆拔　宛郷
あるまして且すねも　有布袋　作　瑞彩
苔ふいのくい　中は一味　呈門
月は晴ても　黒船の　忠右衛門　子
すあしの葉も　ぞめく　雑沒津　巴
千億は封の付たること　朱

太夫揚りと足えぬ内儀　楪
酒ふりもにくからぬ花の半過　年
蝶の機嫌の二つ舞連　郷

先の桃隣子ハ蕉下の客たり
今太白堂甚風流をつゝて
名改の事有再い蕉門の後栄
を賀して

甚ためし園は老るや　桃の華　隨堤楼　次朴

仝

枝〳〵の勝色見せよもゝの花　戯蝶

古集三代の名ありしかも倦主
七旬有余の壯健をことふく

その桃を接穂の花の手柄かな　東川

四季吟　庄順湛一

山〳〵の雲散て後さくら哉　素丸

こちたくハ菊斗なり秋の暮　仝

二つよい事有人めに鳥の聲　眸荒

届くのと毎日〳〵　雲龍かな　東川

夕立や町はづれ　仝
うゝ杖や人も四十の天竺より　仝
あゝ鮓や吹通したる風の果　仝
夕顔や常玉男の色くろき　仝

其日庵祀中

多垣を我か籠よりして田螺かな　雄道
一つかみ思わすれたる雪解水　節丹女
稲妻や折れる亦迄行屆中　古柳

一しきり日ようてもと卯鰹　栞乙
涅槃会や　蝶も出る朽柱　牡丹
藪入や二度のとるる里の月　移文
散りたかる上着はもたぬ筋肉　捌長
池へひいく鏡つき戻す氷かな　雅庵
根泥の中ゆ寝て居て蚊遣哉　雪逸
三寸の仲の中から雲雀かな　我松
雪あの峠を跡ゆ　梅の花　文京

印相の凡ゆ仏くれる巌かな　白芹
簟波のよるべや夢さて海　我泉
一瓣ハ朱ゆ孤して雪解哉　下総布川　素言
懸香や閨をはらうむかの華　五橋
鳥の巣や残ハ楽して京の雑野　仝
菊の香ゆのほせて長き秋哉　仝
松島ハ黒絵ゆ笑ふ小春哉　仝
枯蓮ゆ目を覚させて蛙かな　芦角

引明や雲かたけて ほとゝきす　仝
一葉つゝをしか行や 秋の風　仝
竜胆や 翌スのしら〳〵や 香も寂し　仝
露の巣や 書巣の中の 冬木立　南臺
十丈の 柏を閑し 蟬くゝれ　仝
山〳〵の 甘うや 拔けて 鹿の聲　仝
淋しさを 左右〳〵 引裂く 鵙引　仝

白兎園社中

市堂にも 四五文 散ッて 山 椒　麦陳
藥湯の 往来も 旅や 五月雨　帝岩 茂樂
藤咲や 去年の手入の 二三尺　大沢 狐光
石蔦の 錦の 乱りや 淡路嶋　下絵 茶園
軸先から 庭へ 明にけりとうめらし　下絵 風陽
ぱとゝきす 第ゝ鳴く 時もゝの 雨　仝
榊かゝす 日葉や 草の 枝　梅丸
初立の 鶯見 付たる 柳かな　志夕
麦雨

雪解して山吹香ハうと　梅の花　三光
彌生を前に遣しふ　木陰かふ　陸香
初蟬や寺の奥人聲　蕉雨
蟲くや里木ゐ　初蕨　下弦　蕉花
曾根の松見すて　伊勢
寺ゆれ一里餘ゆ　満干を　奥路
初汐や其時ゆ　石の宮殿　肌　水谷
多仏や其の後ら　人改　咲　所　白英
雪の日や魚菜ゐ　風の浸る音　色道

は初過す波の風　やさくら鯛　桐陰
雉子追ふて這入て寺に椿かふ　柳門
枝も葉も茂れは　桃の梅木哉　方得
鷺の六月寒し　龍安寺　祇葉
鐘撞の響て一聲六ツの花　仝
若竹の四五本高く谷間より　桐陰
瓦山ゐ突出し物や時　鳥　三光
八百屋からふいと出て行螢哉　兎卿

初雪や沖ハ鴎ま　水の陰　李門
寝轉て見る心なしむめの花　祇素
夏艸や水打ツ時ハ秋の風　柳門
引船の先へ散行尾花哉　桐陰
年よれば夢さえ見せす小夜衾　梅年
秋いかま歸ノの跡ハほとゝきす　志夕
夕風やこほれてハ降ル露の秋　麦雨
眠いのかやめは赤の夜寒哉　鬼江

金屏に小鍋立有冬こもり　白英
鐘遠き方にもれてや嶋千鳥　来儀
梅咲やたま猫のよこれ足　兎什
簾捲て見れハ若菜と成にけり　茂蘭
鬼百合のほろりと露をこほしけり　梅年
秋の暮陣へ往て　彩〻
白蓮や奥もさハがす水の陰　三狂
初秋や暖簾ま風の障る音　把菊

下絵

厄除のこゝろを述ニ章

厄はらい火燵の酔の醒た時　三狂
木からしの色ゑ立けり　厄拂　把菊
草庵の腥ものや　かんこ鳥　玉瑞
撫子や　掾ゑ　今川　実法義　色道
箒を出て　望へも　戻らす　熟風　李門
涼しさい　風も　寄らす　苔清水　戌樑
　　弧友

蕎麦切の中ゑ温飩の夜寒哉　祇葉
岩川や　葛咲　詰を　葛の　花　三光
若竹や　木陰に　雪ハ　有なから　梅房
麻の葉も　裏へハ　早し　今哀の　秋　春門
落る葉の　おもゝ　見せたり　初時雨　秋陽
軒はまた　時雨る　れと　入日かな　麦雨
よし原も　晴　寒し　鴨の　聲　三光
千笠に　日も　偽りや　むら時雨　志多

日は落て藪へ時雨る小雀かな　桐陰

高くなる空や足付てせゝの聲　梅窓

板屋しけふハ聞へる　籠の音　柳門

かさいたる宮の蹄あり冬　下総飯高　孤友

卯の花のせわしないの知恵　逢　梅和

雨雪の一皮脱てせゝの　聲　同伴子　栖里

入相の鐘にちりてや飛ぼたる　抱玉

むら雨の横雲はれて目傘　眠石

そろ〳〵と枕ま近し虫の聲　上総松笠　李暁

買立の笠はくもらす田植かな　出羽霧の岡　以京

腹の立時も角なし蝸牛　志夕

卯の花や雪と散ぬる雨の苔　麦雨

雪竹や来年は菜の蒔所　茂樂

十六夜や昼寝の顔のやつれ程　呈瑞

とつさりと花の力やちり椿　駿河　民子

夏艸ま為露の世乱落しより　全　駄雪

同中庵社中

行春やしきりに老の嵐山　桃鏡
名月や錦木立て囲ひ　せん　野菊
さむしさのかそへとまりに棄山子哉　敬雨
角力京踏ひろけたる月夜哉　花口
鶏頭や散もはしめす花一ツ　桃酔
秋風や小町か髪をむすふ時　對笑
白粉の花ちる里や　妹か宿　基童

仝

丘ひとつゆり崩すかと虫の聲　嵐色
恋守れと勅の立たる棄山子哉　夜兎
梅か香や北方来ても寒からす　梅人
遍正の哥もあるへし　竹婦人　仝
郁厂や橋にわたれハ星二ツ　仝
うわりの詠世もおかし　腹と計　仝

仙家より棄(京)綿　桃のねはす哉　嵐亭

仝

桃の食こほれて白し苔の花　人左

名月や出干はかり放生會　雷堂

傘の下草又たりかすつはた　吐月

あるハ又賑ふ宿の礁かな　六宮

酒提て六日の菊の老訪ん　蓼太

仝

芋柳や去年の心のほとり初　倍久翁

和らかに山を分たるかすみ哉　五麻

咲しをや更てほのかに夜の梅　春蟻

亀の背に日の脚永き改戸哉　香頭

鶯やつゝき捨たる哥之助　池柳

若やけり桃の陣の芦畑　文尺

余所の夜は閙きに梅の月夜哉　濱助

古き文せる錦着て行ヶ暮る厂　吳造

時丸

雨の降る夢覚る夜半や鳴蛙　山壽

生海苔や入江の簾朶に身を任せ　舞民

桃咲てむかしに帰る老の垣　来鶯

縋得たり東方朔か薗の桃　北枕

青柔や風の梯取ミたれ髪　柳六

ほんのりと夜は明にけり雲の梅　花曉

しつかりや山の星へ紐子の聲　曉波

玄門に是も咲たり桃さくら　沽洛

日　吳造妻
月　娘

角力取物着て出たり門涼　風牛

夢ならて茄子目出たし朽もとき　秋峨

みす紙のかゝる時こそ蛍取　春蟻

麦の浪まに〳〵聲やはつ鰹　蛍路

若竹の雲を突ぬく勢イ哉　池柳

青空を一枚はねてほとゝきす　文尺

草庵の高士へ膝のす田植哉　吳造

道仲の埃も見へぬ暑さ哉　時丸

井の水の心にぬるむ冬至かな　凡牛
こゝろなき木こいそかしき小春かな　凡馬
水鳥の眸る羽を乾す眠りかな　曲秀
若竹の空や淺黄の雨か障　里曉
荒磯へ凡の捨たる千鳥かな　春蟻
炭賣をまねき寄せけり枯尾花　蚕豆
脇立の背中へ書る炬燵かな　吳造
船既る間はや雪の都鳥　来鶴

手に草履はく春法の稲穂かな　舜民
我のみを咲や牡丹の花の幅　丹志
朝顔や雨に一日歸り華　凡牛
深山迄命しらすや菓り場　凡馬
桐の葉や釣瓶る餘る凡一つ　曲秀
花のみ紅月も奥あり十三夜　旭山改
一しきり人畫りけりけふの月　桃雨
稲刈し跡には鶴の羽音かな　文人
　　池柳

雁ならで蚯蚓の聲す夜寒哉　春頭

気のはかぬ炉を焚へて一葉哉　春蟻

欠た程ちかつきくらし十三夜　時丸

下枝を秋海棠のまくらかな　吳造

老の身も木登りしたき木の実哉　北雄

座頭にも聞せよ蓮の開隣　亀朝

朝竈や家鴨の嘴をすゝく音　青花

隣積んで言根へ繕ひけりの雪　梅窟

松は猶さかえる色や雪の朝　池兼

月星に音の似合ぬしくれ哉　文尺

隣り笠の雪に驚く旦夕かな　時丸

茶竹や囲扇の骨もまだ青し　凡馬

梅咲や糸一筋のゆるゝ日　五庵

青海や雪を乗せたる舟一ツ　仝

初雪や節句庭となり両隣　吳凡

盆燈や鮎焼石の鼻の先　曲秀

見上れば見おろせば山桜　凡牛

所〳〵散なく田や　星明り　凡馬

設られし柳は結句みどり哉　東鶴

替られし名は三千年の花の波　圭子

山笑ふ向ふに海の眠気なり　曲秀

仝

あやめ葺くふかし蓬の門なれば　古人

褥縁を見るすゝハあやさむ　二ツ星　桃張

仝

六妻の墓にまいり

雪の降つもりけるを

つめたい死されと火宅を出にけり　仝

散除は闇にかゝるや井日神　桃隣

玉川の岸に音ある氷かな　仝

軸

稲の香や　我か養ふてけふの月　故

三日月や　はや手に障る草の露　桃翁

仝

追加

掃穂して年寄を忘たり　素白

朧夜や猫も築地の崩より　少観

葉陰の蹲一輪のはちすかな　仝

新蕎麦の便りや嬢に捻られす　仝

孫晨ハ寝心安き蒲団かな　仝

花の酔醒すとて蝶に　閑涼

朱雲は明そこたいし時雨かな　仝

空蟬も武士は尊とき案山子哉　雪猿

初雪や今年の竹の力ほと　狸汁

松風の時〳〵吉をきしくれかな　里霧

てら〳〵と春にこほるゝ旭かな　千條

鯨とも見へる山あり霧の海　漱石

水枯て槁杭右きさかな　桃雨

おそろしき森も落葉と成りに鶴　杉人

朝凪や蕎の水に華の影　梅翁

投入に老の手品や帰花　宗子
黒きまで寒し筑波山　文外
井戸かえのしいし近たり杜若　秀机
岡釣の手あつなくや花落　紫冊
面白や波よも花のさくら鯛　芦舟
沖の帆をしハー隠すや村時雨　文虹
若艸ゐ志ハの駒の歯跡外　慶有
桃咲や伏見の空ゝあつくろし　古人不自斬拾翠

枇杷三代波

むかしく枇杷葉を編て
倩れハ笠にて厭ふ師走
花傳也夏笠ハ冬ハ岡ゑ
なれ旦徒ゑ冬岡車咲有
月の雫枇杷世のと葉花
生をふつゑ薪ゑ迄ゑ

飛脚ところの鴬へたてはなと
くもとやものゝ夕た楽はむら乃
明ふ乃かへと令の開をしらひ
月らきれのすあすまて寄
もらさこしと総まんて月や
雲やるとも句とあり集とれ
詠あのせんへくいりさひとへの

此の源ことに我、るまて風を飛脚
とは名し此冊子をとも二代と
名付ゝる本業十ハ白兎主人
の扉書委し 予持只うき紙
惟ひ是を麁紙黄して燈下I
筆試揉のこ 宮中菴
玄の卯花日 夢左

明和五子冬

浦〳〵へ風のはたぢる（つゝ） 汐千代

蘭の香や 長吏が宿とおもハれす 馬泉

跡ゑ習ひ 光ゑ習ふて 踊かゝ 今

十六夜や 都出ぬけて一刺象 錦葉

雨・雲や 屋ゐ あふせて花葵 今

錦雞のはつかしるや葉鶏頭 古人 羽白

しら魚に目の有はつよ手一束 古人 隨有

桐雨